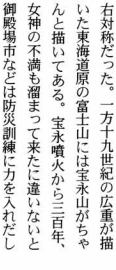
富士を仰いで五十年

三島市　杉臣　武（幸町出身）



郷里を出て富士山を間近に見る土地に暮らして五十年、これまでの人生の七割を過ごしたことになる。最初の出会いは教員採用試験の時だった。学生時代にも遠目に見たことはあったかも知れないが、これが富士山だと意識したことはなかった。

採用試験を終えて東京に戻る途中、列車の震動に身を任せてうとうとしていた私が目を開けた時だった。左の車窓に富士山が見えた。吉原のあたりだった。良く晴れた冬の空に純白のそれはあまりにも近くあまりにも大きく、あまりにも鮮烈な姿で私を圧倒した。思わず「田子の浦にうち出でて見れば」と赤人の歌が口をついて出た。ここに就職しようと決めたのはその時である。高田に戻って教員になってくれると目算を立てていた親には済まないことをしたが、一目惚れみたいなものでどうしようもない。その後ベビーブームで教員が足りなくなった時、新潟県から「戻ってくれば優遇する」と誘いがあったのだがお断りしてしまった。それでまた親をがっかりさせ悪いことをしたが、コノハナサクヤ姫に魅入られては逃げようがなかった。

富士山を遠くからしか見ていない人は、四面玲瓏どこから見ても同じ姿と思うかも知れないが、近くで見ればかなりでこぼこである。赤人が歌った頃の富士山がどんな格好をしていたか写真がないから分からないが、今とは大分違っていたはずだ。コノハナサクヤ姫がかんしゃく玉を破裂させるたびに富士山はその姿を変える。そして災難を蒙った人々は浅間神社の祭を盛大にしてご機嫌を取らなくてはならなかった。田子の浦から見ると右肩が怒っているように見えるのは一七〇四年の宝永噴火の痕である。かんしゃく玉が初めて記録されたのは赤人の死後だから、彼の目に映った富士山はまだ左右対称だった。一方十九世紀の広重が描いた東海道原の富士山には宝永山がちゃんと描いてある。宝永噴火から三百年、女神の不満も溜まって来たに違いないと御殿場市などは防災訓練に力を入れだした。「動かざること山の如し」と言うが、富士山には噴火の他にも大沢崩れという崩落現象があって時々刻々動いている。いずれ西面が二つに割れてしまうに違いない。

教員になって伊豆半島の先っぽの高校に赴任していた時、三年生の希望者を連れて富士山に登ることになった。まだ山頂のレーダーも周遊道路も何もない頃である。富士宮浅間神社から麓までバスが通っているだけで、初日は五合目の小屋にたどり着くのがやっとだった。翌朝ご来光を拝んで山頂に向かう。苦労した分山頂の気分は格別だった。その頃は登山者も少なく山もきれいだったが、観光道路が出来て五合目まで車が行くようになると、あっという間に富士山は人とゴミの山になって登山の意欲を失った。折角近くに住んでいながら登ることはなく、太郎坊にスキーに行くくらいでお茶を濁して来た。

富士山は最近パイオトイレを導入して一時よりは清潔になったようだ。私も何度かボランティアの生徒とゴミ拾いに行ったことがある。この山で飯を食っている人は観光から不法投棄の業者まで、どのくらいいるか分からない。世界遺産にしようと張り切っている人もいるが、商魂が見え隠れしていまいち乗る気になれない。現に海外からの客寄せをもくろんで赤字必至の「富士山静岡空港」を造ったはいいが、他人の土地の立木の測量を間違えて開港は遅れるわ、地方財政逼迫の折に余分な県費を払にゃならんわとドタバタ劇を演じるアホ知事も出た。

アホと言えば昔から「富士山に一度登らぬはバカ、二度登るもバカ」と言う。私は頂上まで二度登った。アホのまま死にたくはないからもう一度登ればいいのだが、心不全のおかげで高山病の心配がある。アホのままで死にそうだ。